



Title	視覚伝達における漢字のデザイン性に関する研究 : 象形性の復活
Author(s)	徐, 攀
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53545
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

視覚伝達における漢字のデザイン性に関する研究

— 象形性の復活 —

徐 攀／テック・ワーク株式会社

1 研究目的

漢字は3500年の歴史があり、使用されてきた時間が世界で最も長く、現在使われている世界の主要な文字の中で非常に稀な表意文字である。漢字は複雑な形をしている。一字ずつ意味が違っているため、文字数が非常に多い。「複雑な形」と「文字数が多い」ことにより、漢字には、書きにくい、覚えにくいという「欠点」がある。一方、「表意文字」であるため、豊かなビジュアル表現が可能であるという「長所」がある。このような「欠点」と「長所」により、長年に渡って、漢字の周りに様々な「変化」が起きてきた。

現在、社会全体はグローバル化の道へ進んでいる。それにともなって、情報を伝達する役割を担う文字言語に対して、便利さが求められると同時に、一極化に進む傾向が現れつつある。今、どんな社会でも、世界の共通文字言語として使われているアルファベットの影響を受けざるを得ない状態になっている。漢字はかつてない多様な問題を抱えることとなった。

半世紀前の日本と中国で漢字の使用をやめようという運動が起こり、両国では漢字の簡体化が進められた。韓国では漢字を廃棄する政策が実施された。しかし、近年、いずれの地域においても、漢字文化を守ろうとする風潮が起り始めている。

本研究は、このような背景において、視覚伝達の視野から、現代社会における漢字の問題点について、漢字の継承を意図しつつ、研究を進めた。

2 研究方法

まず、漢字のデザイン性、つまり文化を背景にした長い歴史を持つ表意文字である漢字の美を研究するために、文字のデザインは文化そのものであるという定義を前提にして、漢字の問題点を明らかにした。そして、漢字の原点に立ち戻り、漢字の変遷の分析を通して、漢字のアイデンティティを確認し、漢字のタイポグラフィ（活字フォントのデザインを含め、印刷物のための文字を組むという意味である。いずれにしても文字の字体やバランスに配慮して、文字を美しくする方法）を再構築した。漢字を次の世代に繋ぐために、漢字の新たな構築を試みた。

本研究は四つの章に分けて、漢字の字体と書体の二つの「形」の変化について、漢字の過去と現在の変貌を分析しながら論じた。

第1章では、近現代における社会構造の変化と西洋文明の繁栄によりもたらされた漢字の変化を概観した。漢字の大きな問題点として、近現代漢字字体の大きな変化である漢字簡略化のことを取り上げた。中国の簡体字の問題、東アジア漢字文化圏の文字の変化などについて考察を行った。簡略化された漢字の形は、元の象形性が非常に薄くなり、表意性が失われて、記号になってしまった。このような漢字は学習の速成には実効があった反面、漢字の視覚表現は不明瞭となり、非常に中途半端な形であると論じた。

第2章では、漢字のあるべき姿を探すために、漢字の最初の形である甲骨文字に立ち帰り、漢字と絵の関係を探った。文字言語学者の研究によって、漢字は絵から生まれて現在

に至っても、漢字の大きな特色は象形性であることを学んだ。

この章での一連の制作は、「漢字から絵へ」、「漢字と絵」、「絵から漢字へ」など三つの制作角度から、表現方法を検討しながら、「象形文字」という漢字の特色を手掛かりにし、漢字が絵へ展開していく可能性を作品を通して訴えた。漢字の持つ視覚的な表現力は非常に豊かであることを検証した。

第3章は、タイポグラフィの角度から見た書について論じた。象形という特徴を持つ漢字は、様々な書体を生み出した。象形性が強く曲線の多い「篆書」、曲線が減り横線の筆使いの変化を強調する「隸書」、四角いに整った形の「楷書」、流暢で書きやすい「行書」、リズム感が強い「草書」などである。書の美的法則は現在のタイポグラフィにどのように生き続けているのか、実際にはどのような影響を与えたのか、などを様々に検討した。

第4章は、現在社会における、漢字の主な姿であるフォントの特徴を概観した上で、「新書体の提案」を行った。ここで行った書体の提案は、漢字の流れに基づいて象形性によって生まれた歴代の書体の特色を生かそうとする試みである。漢字の形の変化から生まれたそれぞれの書体から、字画や字形の特徴を抽出した。そして、その特徴を基本にして、現在のフォントと融合させることにより、新書体を考察した。これらの制作を通して、グローバルな現代社会に対して、漢字の特色を強調し、書体開発の新たな方法論を提案したのである。

以上の研究と制作を通して、文化を背景にした漢字のデザインの本質を探究した。漢字は視覚伝達を通して人間のコミュニケーションに務めてきたが、同時に、長い歴史の中で蓄積されてきた文化の反映でもあることを強

く訴えた。

3 結 論

ここで提案した本研究の総括ともいえる「現代象形文字」は、表意の機能を最大限に発揮するために、今日の漢字に失われた部分である「象形性」を制作要素として取り込んだ。文字言語学者の研究理論に基づき、漢字本来の意味を保った上で、現代的な感性を加えて、新たな象形漢字を提案したのである。この制作によって、漢字の表意機能を十分に果し、漢字の形を「美しい」ものにするには、象形性は今日でも無くてはならない要素であることを明らかにしたつもりである。

多くの人々に読まれる印刷物の文字は「読みやすさ」と「美しさ」が求められる。これはいつの時代にも変わらないことである。本研究を通して「読みやすさ」と「美しさ」を生み出す漢字のデザイン性の出発点は、象形性にあることを明らかにした。象形性を元にした漢字の形は、多様で独自の書体を開発しながらも、文字言語の持つ固有文化を視覚的に、直接的に訴えることができた。象形の特徴を持つ表意文字の漢字を使うことにより、情報の解読速度を高めることができる。文化の蓄積である漢字の象形性は、今日の社会において、まだ重大な意味性を持っていると考える。

漢字における美意識は、時代とともに変化していく。しかし、どのような変化が起きても、漢字に宿る象形性を守らなければならない。もし、漢字が完全に記号になってしまったら、それは取り返しのつかない過ちであり、漢字ではなくなるといえるだろう。